

2026年4月12日 説教「小さい事に忠実な管理人」

ルカの福音書 16章 1～13節

先週は復活節でした。今朝はルカの福音書の元の学びに戻りますが、いつも十字架と復活の主を覚えていきます。

1. 主人の財産を乱費する管理人のたとえ話 (1～4節)

- ①管理人への訴え (1) 「イエスは弟子たちにも、こういう話をされた。ある金持ちにひとりの管理人がいた。この管理人が主人の財産を乱費している、という訴えが出された。」

15章のわかりやすいたとえ話に続く16章のたとえ話は、うって変わって少しわかりにくいのです。この話は弟子たちに向けて話されたものです。設定として出てくる人物は、金持ちと管理人です。財産管理を任された管理人が、財産を乱費しているという訴えがあるということです。

- ②主人の決断 (2) 「主人は、彼を呼んで、言った。『おまえについてこんなことを聞いたが、何ということをしてくれたのだ。もう管理を任せておくことはできないから、会計の報告を出しなさい。』」

金持ちの主人は管理人を呼んでとがめました。「おまえについて、私の財産を乱費しているということを知った。いったいどういうことだ。私も少し調べてみたが、間違いなさそうだ。もはやお前を管理人として立てておくわけにはいかない。すぐに正確な会計報告を私に提出しなさい。」

- ③管理人の思い付き (3～4) 「管理人は心の中で言った。『主人に この管理の仕事を取り上げられるが、さてどうしよう。土を掘るには力がないし、物ごいをするのも恥ずかしいし、ああ、わかった。こうしよう。こうしておけば、いつ管理の仕事をやめさせられても、人がその家に私を迎えてくれるだろう。』」

その時、管理人は心の中で、思ったのです。主人から管理人という立場を解任されそうだと。どうしようか。解任された時、土を掘る労働をでは体力がない、物乞いするのは恥ずかしい…。その時はたと思いついたことは、仕事を解任された時の次の職を得る策でした。

2. 管理人のなしたこと (5～8節)

- ①主人に負債のある人々に (5～7) 「そこで彼は、主人の債務者たちをひとりひとり呼んで、まず最初の者に、『私の主人に、いくら借りがありますか。』と言うと、その人は、『油百バテ』と言った。すると彼は、『さあ、あなたの証文だ。すぐにすわって五十と書きなさい』と言った。それから、別の者に、『さて、あなたは、いくら借りがありますか。』と言うと、『小麦百コル』と言った。彼は、『さあ、あなたの証文だ。八十と書きなさい。』と言った。」

管理人の講じた策は、主人に負債のある債務者達に対することでした。最初の人への負債は「油百バテ」ということでした。およそ3300リットルです。管理人は彼に証文に50バテと書かせました。別の人の負債は小麦百コルでした。37000リットルです。彼

の証文には 80 コルと書かせました。いずれも管理人に与えられている権限でした。また利息計算をするとそれらの額は彼らが借りた時とほぼ同じ額でした。このように彼らに恩恵を与えることで解任された時に彼らからの職を得ることをねらっていたのです。

②不正な管理人をほめ (8)「この世の子らは、自分たちの世の**こと**については、**光の子らよりも抜けめないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。**」

主人はこの管理人がこの世に精通していて、光の子(クリスチャン)よりも利口で、主人の金を乱費していたにもかかわらず、抜け目なく行動したことからそれをほめたというのです。

③不正の富で (9)「そこで、わたしはあなたがたに言いますが、**不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。**」

ここからは主イエスのたとえに関してのまとめのお言葉です。ここにはなんと、「不正な富で、自分のために友をつくりなさい」とあります。それはたとえ話から続いていて、それほどの知恵を尽くしても信頼できる友を作れと言われているのです。なぜならば、彼らは永遠の住まいへの道を開いてくれることになるかもしれないということなのです。

3. 神に忠実であること (10~13 節)

①小さい事に忠実な人 (10)「**小さい事に忠実な人は、大きい事に忠実であり、小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です。**」

たとえ話からの適用とも言えます。小さい事に忠実な人は大きい事にも忠実であるという原則は、主人がいる時にもいない時にも、任された事を忠実に行うしもべのこと(マタイ 24:45)とも関係があります。そこには「忠実な賢いしもべ」とあります。

②他人のものに忠実である (11~12)「**ですから、あなたがたが不正な富に忠実でなかったら、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょう。また、あなたがたが他人のものに忠実でなかったら、だれがあなたがたに、あなたがたのものを持たせるでしょう**」

主イエスは不正な富にも忠実でなかったら、まことの富を任せることはできないと不思議な事を言われます。他人のものに対して忠実な人こそ、重要な仕事が任されることになるというのです。

③ふたりの主人に仕えることはできない (13)「**しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、また一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。**」

忠実なしもべは一人の主人だけに仕えます。神と富という二人の主人の双方に仕えることはできないとまとめられるのです。神を主人とする者は、地上の富ではなく、永遠の富を見ながら生きるのです。

《展開と結論》今朝の聖書箇所には様々な解釈があります。主イエスはどのようにして、「不正な管理人をほめ」「不正な富で、友をつくれ」「不正な富に忠実であれ」などと言われたかという疑問の声が聞こえてきます。また、この部分から、教訓的な所だけを読んでいくというのも、不十分です。やはり、聖書はどんなに読みにくくても、その全体の意図をくみ取る姿勢が必要です。

15 章の話はパリサイ人たちを意識して語られたのに対し、この 16 章は弟子たちに語られているという点が大切です。そのことを覚えながら、「世俗に遣わされる宣教者」という視点からこれを読んでいきたいと思えます。弟子たちが将来において、宣教者として世の中に出ていくことになることを見越して、主は語っておられるのです。もちろん、宣教に関することだけではありませんが、弟子たちの宣教への道を考えてと理解しやすくなります。

第一に弟子達には管理者として立てられていく自覚が必要でした。人や財に関する管理が重要でした。ここのたとえ話に出てくる管理人は、主人の財を乱費し解任されるということになり、新たなる人々との関わりを作るための知恵を働かせました。そして、主人から与えられている権限を最大限に用いて、次のステップに向けての準備をしました。少し悪賢いとも思えますが、ここでその主人は彼の世の中の知恵を駆使したやり方をほめています。私たちには神からの様々な賜物や知識、知恵、体力、財力などが与えられています。しかし、それらの管理者として、どれだけ用いているかと問われます。ここの管理者はお金の管理などで不正もあり、反省しなければならない点はあるのですが、ここでは管理者としての知恵を主はほめて下さっています。「蛇のようにさとく、鳩のように素直でありなさい」(マタイ 10:16)とありますが、教会、家庭、社会において、私たちが神より与えられているものを管理者として、それらを賢く用いる心と信仰を与えていただきましょう。

第二にその上で、管理者が心がけなければならぬことは、小さな事に忠実である心です。概して私たちは大きな事には心は向けるが、小さな事はないがしろにしがちです。大谷選手は、日常生活において食事、睡眠、綿密、準備運動等を忠実にこなしているようです。皆さんも、社会や家庭で忠実に歩んでおられますが、信仰者として、密室の祈り(マタイ 6:6)、御言葉を昼も夜も口ずさむこと(ヨシュア記 1:8)、時が良くても悪くても御言葉を伝える(Ⅱテモテ 4:2)、いつも喜び、感謝すること(Ⅰテサロニケ 5:16~18)、隣人を自分自身のように愛すること(マタイ 22:39)など、小さな事を忠実に行うことが大きな事を忠実にを行う一歩だと心がけましょう。

第三には、管理者として、神につか富につかかと、問われることはしばしばあることです。富の誘惑は小さくはないのです。いつのまにか、神ではなく富の方に心は向いてしまいます。もうひとたび、「神の国とその義を求める者には、全てが備えられる」(マタイ 6:33)ことをおぼえましょう。

弟子たちはこうしたことを宣教に出る前に学んでおく必要があったのです。私たちとて同じです。主から託された管理者としての自覚をもって、これからの歩みを進んでいきましょう。